

### ①白石城

白石城は伊達家の重臣・片倉家が代々居城し一国一城令後も例外的に存続、仙台藩の南の守りを務めた。今は公園となり、平成7年に三階櫓と大手門が忠実に再現された。

### ②武家屋敷

1730年に建築されたことが確認されている。旧小関家の屋敷。片倉家の家臣・中級武士の一般的住居である。

### ③常林寺

白石山常林寺は時宗で本尊は阿弥陀如来です。鎌倉藤沢の清浄寺光寺の第五世安国上人の開基。白石で最初に開山され当時は現在の堂場前にあり片倉小十郎景綱の時代に現在地に移ったといわれ、明治維新後、解体された白石城の「時の太鼓」を保管しています。県内で最も早く開花する桜の老木がある。

### ④清林寺

浄土真宗本願寺派（本山は京都の本願寺）の寺院で本尊は阿弥陀如来です。清林寺の開基は善久と申し、真田幸村の遺臣三井豊後。縁あって京都の本願寺准如上人のもとで出家し得度し1634年に善久坊と改称して現在に至っている。寺紋は真田家の紋所である六文連銭を用いている。

### ⑤傑山寺

常英山傑山寺は臨済宗妙心寺派で本尊は枯華釈迦如来です。白石城主・片倉小十郎景綱が1608年3月片倉家の菩提寺として創建。妙心寺第十一世天心智寛大和尚の開基と伝えられています。初代景綱の墓は一本杉を墓標にしたと伝え、現在も成長を続けています。樹令約400年の大樹。歴代の奥方、初代谷風、松前安広の墓などもあります。

### ⑥当信寺

功德山当信寺は浄土宗で本尊は阿弥陀如来（市指定文化財）です。1597年良益上人の開基と伝えられています。山門は白石城東口門前で三間、一戸、二階建瓦葺を移築したものです。境内には真田幸村が大坂夏の陣の際、片倉重長に託した阿梅・大八（幸村の遺児）の墓があります。阿梅の墓石は如意輪観音像を象っており、その形が歯痛のために頬を抑えているように見えるところから虫歯に苦しむ人たちは、この墓石を削り付けると良く効くとの迷信が生まれました。

### ⑦専念寺

高德山専念寺は浄土真宗（西）本願寺派で本尊は阿弥陀如来です。1602年、京都西六条成覚寺住職徳力祐進次男道願律師の開基と伝えられています。初代景綱に重く用いられ千手院清昭とともに帷幄にあり一世から七世までは片倉家より2貫文の禄を受け、留守居格の寺院であったといわれる。太子堂は1942年に斑鳩法隆寺より迎えた国宝聖徳太子象の御分身のお堂。毎年10月11日に御開帳になる。

### ⑧延命寺

瑞珠山延命寺は真言宗智山派に属し、本尊は大日如来です。山門は白石城厩口門を移築したもので、三間一戸、二階建、瓦葺。



白石城



武家屋敷



一本杉



傑山寺

## 初代小十郎・片倉景綱

初代小十郎である片倉小十郎景綱は1557年米沢八幡神社の神主・片倉部少輔景重の次男として出羽国長井（山形県長井市）に生まれた。小十郎は通称である。

片倉家は元々信濃国から陸奥国に入り、1540年頃、景重が伊達家15代伊達晴宗（政宗の祖父）に仕えたのが始まりである。景綱は伊達家16代伊達輝宗（政宗の父）の徒小姓として仕え、宿老遠藤基信の「後來、必ず国家の大器たるべし」との強い推挙によって1575年に政宗の近侍となった。この時、景綱は19歳、政宗は9歳。元服して藤十郎政宗となるのは翌年のことであり、また幼名梵天丸を名乗っていたころである。「老翁聞書」によれば、景綱は舞曲に優れ、その美しい舞姿が輝宗の目に留り、徒小姓に抜擢されたといわれる。

小十郎景綱が白石城に入城したのは1602年、関ヶ原合戦の二年後のことである。石高は1万3千石と多くはないが、この城に入るのは、小十郎景綱において他にない。

天下人たちと真っ向から渡り合い、臣下となるも決して屈服することはなく、最後まで天下への野望を失うことがなかった伊達政宗。

片倉家は政宗に付き従った重臣の一人であり、伊達軍の先頭には必ず片倉家の旗印「白地黒釣鐘」が翻っていた。「伊達の先陣」は片倉家の誇りであった。戦国の世において対価を求めず、主のためだけに尽くした「伊達の先陣」片倉小十郎という智将なのだ。

## 片倉重長

初代小十郎景綱の子で景綱より「二代目小十郎」を与えられる。名ははじめ重綱を名乗ったが、三代将軍徳川家光の嗣子の家綱の諱字を避けて重長と改名した。

重長の初陣は17歳。1600年の白石城攻めである。

重長は当時の居城だった亘理城の留守居を命じられていたが、こっそりと父の後を追って参陣。片倉隊の先頭を切って上杉勢が守る白石城二の曲輪の塀を乗り越え本丸一番乗りの功名を挙げたのである。景綱からは叱責されるが、この時、景綱は将たる心得を説いて小十郎の名を重長に譲り、自身は備中と改めている。

重長に「鬼小十郎」の名が奉れたのは大阪の陣での鬼人のごとき活躍からである。1614年10月、家康の大阪追討令を受け、政宗も大阪に向けて出陣することになった。重長30歳、景綱は57歳で病床にあったため、重長は直接政宗に父と同様に先陣を申し出ている。政宗は「その方に御先鋒仰せ付けられる候て、誰に仰せ付けられるべきや」と快諾。仙台城を出陣した政宗が白石城に立ち寄った際、景綱は先陣を賜った礼を述べ、その場で片倉家の旗印「白地黒釣鐘」を重長に手渡し、落涙しながら次のように語った。

「我この纏を以て百年来軍忠を致すみな知るところなり。今度その身に与ふ。この功を無にすることなかれ」重長は二代目小十郎の名に恥じない武功を轟かせるのである。そして「小十郎」の名は、その親子二代の功績とともに片倉家に受け継がれた。

## 大阪夏の陣・小十郎重長と真田幸村

1615年5月、大阪夏の陣の合戦で、小十郎重長は道明寺口で出撃してきた薄田隼人正兼相、後藤又兵衛基次の軍と戦いを交え、これを打ち破った。

この戦で重長は「鬼小十郎」と称賛され、伊達勢の手柄は日本一と天下に認めさせた。

大阪城落城前夜、真田丸に陣を構えていた幸村は自らの戦死を覚悟した。しかし、幼子阿梅は助けたいとの願いから、重長を智勇兼備と見込み、重長の陣に、幼子を託す旨の矢文を射かけた。幸村の心情を察した重長は承知する。この夜遅く、重長の陣屋に鉢巻姿で長刀を持った15～16歳くらいの女の子が訪ねてきた。この子が阿梅と穴山小助の娘であった。翌、大阪城は落城し、幸村も戦死した。京都に隠棲していた幼子 {阿菖蒲（6女）、おかね（7女）、大八（次男）} を探し出し、白石城二の丸で密かに養育した。阿梅は重長の後妻となり、阿菖蒲は田村定廣の妻に、おかねは早世し、大八は片倉家家臣となり、後に伊達藩士に取り立てられ、1712年真田姓に復した。

